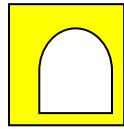


日吉台地下壕保存の会会報



第140号
日吉台地下壕保存の会

第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会

「戦争遺跡の保存活用と地域をつなぐ平和活動」参加報告

副会長 亀岡敦子

戦後40年経たころの日本社会は、高度成長から続くバブル経済の波が、多くの貴重な歴史遺産を破壊するのを黙認していた。それが豊かな社会の証であるかのように錯覚していた。破壊は古い時代の遺構だけではなく、日本人だけでも310万人もの命を奪ったアジア太平洋戦争期の軍施設や地下壕にも及んだ。同時に、危機感を抱いた専門家や市民を中心に、それらを戦争の実相を伝えるために保存し、調査研究し活用しようとする団体が各地に誕生した。私たち日吉台地下壕保存の会も、そのころ慶應義塾の教職員と地域住民とで発足した市民の会である。また各地の団体が、情報交換のためにネットワークを作り、各地持ち回りで年に一度全国大会を開くようになった。今年は酷暑が一休みした8月24日から26日、熊本城をのぞむ熊本市国際交流会館で開かれた。

大会に参加すると、その土地で戦跡保存と活用にも大きな差異があることがわかる。23回目の開催地熊本には、西南戦争の激戦地としての顔、第六師団を中心とする軍都としての顔、航空特攻の訓練基地としての顔などがある。そのうえ、2016年の地震は戦争遺跡にも甚大な被害がでたが、それ故に今年の開催には大きな意義があった。以下は参加者による3日間の報告である。



工事中の熊本城本丸



くまモン

【目次】

報告【1-2p】 第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会参加報告

熊本大会分科会報告【2-3p】

☆第一分科会 保存運動の現場と課題

副会長 亀岡敦子

☆第二分科会 調査の方法と整備技術

会員 中田 均

戦争遺跡保存全国ネット運営委員

菊池 実

☆第三分科会 平和博物館と次世代への継承

副会長 亀岡敦子

熊本大会フィールドワーク【4-5p】

☆現地見学会Aコース

副会長 喜田美登里

☆現地見学会Bコース

会員 川口重雄

拡大ガイド学習会再録【6-10p】

☆ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築

運営委員 佐藤宗達

☆海軍特別年少兵(特年兵)・少年兵

運営委員 山田 譲

☆航空特攻戦死者数について

運営委員 岡本雅之

寄稿【10p】 日吉のガトール養成講座を受講して

受講者 嶋谷克彦

お知らせ【10p】 第14期ガイド養成講座開催

お知らせ【11p】 第27回戦争展実施要領

報告【12p】 港北図書館パネル展示会&講演会

運営委員 小山信雄

連載【12-13p】 海外戦跡めぐり(ベトナム)

運営委員 佐藤宗達

聞き取り【14-15p】 山本克彦さんの小学生時代

運営委員 山田 譲

活動報告【16p】 2019年7~10月

(1)8月24日は全体集会が開かれた。大会委員長と熊本市長の挨拶に続いて、大阪大学名誉教授猪飼隆明氏による「熊本城と軍都熊本」と題する記念講演が行われた。西南戦争で焼失した城下に軍が8万2千坪にも及ぶ軍の施設を作り、そのまま敗戦まで継続したことが解りやすく語られた。その後なんと、熊本のスター「くまモン」が登場し、ひと時ホッとした空気が流れた。休憩後、戦跡保存全国ネット共同代表の出原恵三氏と、くまもと戦跡ネットの高谷和生氏の報告があり、夜は交流会で旧交を温めた。

(2) 8月25日は3部門に分かれての分科会(第1「保存運動の現状と課題」・第2「調査の方法と整備技術」・第3「平和博物館と次世代への継承」)が開かれた。今年は九州と山口県を中心として24本の報告があり、内容も充実していた。最後にアピールを読み上げ、来年の開催地東京都東大和市と、大奮闘の熊本の実行委員に盛大に拍手して閉会となった。

(3) 8月26日は2台の満席となった大型バスに分かれての見学会。Aコース「熊本市内の戦跡をめぐる」とBコース「菊池飛行場と黒石原奉安殿をめぐる」が雨の中行われた。両コースとも実り多い見学であった。

熊本大会 分科会報告

第一分科会報告「保存運動の現場と課題」

浅川地下壕の保存をすすめる会・当会会員 中田 均



発表される中田均さん

①高知の出原恵三さんからは、『旧陸軍歩兵第44連隊弾薬庫等の保存』～2017全国シンポ決議の甲斐あって、弾薬庫と講堂が売却処分されなく保存の方向性が示されたことが報告された。

②長野の松樹道真さんと北原高子さんからは、『名前が判ってきた、松代大本営工事に関わった朝鮮人労働者』～昨年を引き続きの分析結果が報告され、今後は労働実態の再検証が課題である。

③鹿児島の八巻聡さんからは、『鹿児島における本土決戦準備』～米軍の上陸(オリンピック)作戦に対して志布志湾ではどのような防備があったのか、内之浦臨時要塞(砲台)について報告がありました。

④東京の中田均は、『本土決戦準備(米軍コロネット作戦)期における三浦半島・江ノ島・二宮の戦争遺跡の現状』～江ノ島や三浦半島には海軍が構築した特攻基地跡(小網代・稲村が崎)、砲台跡(江ノ島)や洞窟陣地跡がいまでも残るなどの報告をし、現地写真も紹介しました。

⑤神奈川の大黒春江さんからは、『野島掩体壕を文化財指定遺跡に!』～故原田さんの遺志を引き継ぎ日本一の航空機用大型隧道「野島掩体壕」の指定文化財を訴えた。

⑥東京の中野志乃夫さんからは、『戦災変電所(東大和市)保存運動の歩み』～来年度の東大和大会ではメインとなる戦災建造物「変電所」の到達点と課題について報告がありました。

⑦宮崎の追立敏弘さんから、『八紘一字の塔を文化財に指定し、戦争遺跡＝警告の碑として平和教育に活用する』～戦争遺跡のあるべき姿についての報告がされました。

⑧京都の奥村英継さんから、『2018インパール・コヒマ平和ツアー報告』が報告されました。

第二分科会報告「調査の方法と整備技術」

戦争遺跡保存全国ネット運営委員 菊池 実

参加者は例年と同じで30名前後である。報告は8本、それを地域別にみると、北九州5、長野1、海外2である。さらに内容別に見ると、陸軍関係3、海軍関係2、地下工場1、海外の2本はサイパン・テニアン・グアム、パラオ・ペリリュー島となる。

具体的に見てみよう。陸軍関係では、中原周一氏(下関市教育委員会)による、幕末期から

明治期にかけての下関要塞についての詳細報告、安部和城氏((公財)北九州市芸術文化振興財団)による、明治期の歩兵第14連隊弾薬庫についての報告。これは弾薬庫の基礎構造と日本各地の近代遺構の基礎構造を比較し、明治時代を中心とした近代構造物における基礎構造の変遷を検討したものである。そして前菰廣幸氏(NPO 北九州市の文化財を守る会)による、太平洋戦争中の地上に残る高射砲陣地の残存遺構についての報告である。

海軍関係では、工藤洋三氏(空襲・戦災を記録する会全国連絡会議)による、本土決戦期の下関市蓋井島の海軍防備衛所の報告。これは米軍史料を活用しつつその実態を解明した。現在までも残る「偽装大砲」には驚かされた。池田拓氏(九州近現代考古学研究会)による、福岡市「海の中道青少年海の家」に残る大戦末期の飛行場跡を再調査した結果、現在までも21基の掩体壕と誘導路が保存されている、国内でも非常に珍しい事例報告である。

地下工場の報告は平川豊志氏(松本強制労働調査団)による、米国戦略爆撃調査団資料に見る地下壕とその周辺について。この報告については、安全対策や管理・責任等の問題についての質問があった。(戦跡巡検調査団)による南太平洋の戦跡については、国内の戦跡だけではなく海外に残る戦跡にもあらためて目を向けていく必要があること、その過程で従軍体験の証言や遺品の紹介なども行われた。

第2分科会の報告は、埋蔵文化財として詳細に調査された事例やその問題点、地上に残存する施設の確認調査とその特定問題、米軍史料の活用等、調査の方法について様々な提言が行われている。戦争遺跡調査にとって有意義な分科会となっている。

第三分科会報告「平和博物館と次世代への継承」

副会長 亀岡敦子

第3分科会は、戦争の記録と記憶をどのようにして継承するかの実践及び問題提起の場である。今年は8本の報告があった。

- ① NPO中帰連平和祈念館芹沢昇雄氏の【「中帰連平和祈念館」近況】で、ボランティアと寄付で運営される私設館の活動。
- ② 大村市立資料館(大村市教育委員会)山下和秀氏の【大村市近代資料室と近代資料の保存・継承の取り組み】は、行政が市の中心地に開設した資料館についての報告。
- ③ 亀島山地下工場を保存する会岡野弘氏の【「亀島山の歌～平和をいつまでも～」完成】は異色で、テーマソングを皆で鑑賞した。
- ④ 大分県文化財保存協議会神戸輝夫氏の【宇佐市立平和ミュージアム(仮称)をめぐる諸問題について】は、ミュージアムの開設理念と内容の大切さを浮き彫りにする報告であった。
- ⑤ 豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会伊藤泰正氏の【豊川海軍工廠平和公園開園から一年】は、市民がまず行動を始め、行政を動かした好例であろう。
- ⑥ 筑波海軍航空隊記念館金澤大介氏の【公立の戦争記念館はリベラルでありえるのか?】は、実践の中から見た疑問点が語られた。
- ⑦ 出水市教育委員会文化財課橋元邦和氏の【出水の歴史資産戦争体験の収集と活用について】は、自治会を通して戦争体験者へのアプローチ等、行政ならではの利点を知ることができ、戦跡調査や資料館設立における官民協働の大切さを実感した。
- ⑧ 豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会篠田真由美氏の【豊川ピースツーリズムと次世代の交流】は、興味深いものであるが、紙上報告のみであった。

近年戦争遺構を活用しての公立のミュージアム設立や、計画が進んでいるが、理念と何のためのミュージアムかを、官民、納得のいくまで、学習し対話してほしいと心底願う。

熊本大会 フィールドワーク

現地見学会Aコース「熊本市内の戦争遺跡を巡る」

副会長 喜田美登里



三菱重工熊本航空製作所跡

熊本大会開催中終始降り続いた雨の中、補助席まで満席のバスに乗る。熊本市民会館（熊本城行幸橋向い）から出発したバスは陸上自衛隊健軍駐屯地に向かって、熊本城の東側を上っていく。記念講演で猪飼隆明先生が話された「熊本城と軍都熊本」。1872（明治5）年鎮西鎮台設置から西南戦争を経て、焼け跡となった城下に軍部が広大な軍の施設を建設し、次第に市の東部、健軍・帯山等に拡大していったとの事。様々な戦争遺跡が自衛隊駐屯地や学校の構内に残されている。車内でガイドの方から地元中学校の総合学習で生徒の聞き取りから掩体壕を見つけたお話を聞く。証言から竹林を探し回った生徒

たちが発見した。発見された掩体壕は整地されてしまったが、パンフレット『健軍飛行場』に写真が記載されている。

陸上自衛隊健軍駐屯地でバスを降り、旧三菱重工業熊本航空機製作所第1組み立て工場跡に着いた。三菱名古屋で完成した機体を分解し、ここで再度組み立てた四式重爆撃機「飛龍」を敗戦までに46機生産した。最大6機が同時に組み立てられる工場は採光のための24連ノコギリ屋根鉄骨構造物。空襲に遭うも、改修工事をして当時の姿のまま、駐屯地車両の整備など、陸上自衛隊西部方面総監部健軍支処棟として利用。

駐屯地内に移設された「義烈空挺隊慰霊碑」がある。雨のためテントを張って下さっていた。健軍飛行場は義烈空挺隊の沖縄特攻の出撃基地（1945年5月24日）であった。輸送機で強行着陸して、敵航空機と飛行場破壊を目的。14名×12機 168名中99名戦死。

車窓からの「旧三菱引込線」「工兵第六聯隊門柱（熊本大学）」「第十三聯隊正門」「野砲兵第六聯隊営門門柱（白川中学校）」の説明を受け、熊本学園大学第2体育館へ。ここは旧歩兵十三聯隊酒保・食堂跡。平屋建てのズングリした建物は建設年代から見ても慶応高校第1校舎と同じアールデコ様式のようなだ。頑丈で地味、華奢な装飾。自然採光も工夫されている随分と洒落た食堂だ。現在、卓球・フェンシング・ボクシング部が使用。

熊本城に戻り、午後にはまた同じルートで健軍を経て阿蘇熊本飛行場から帰ってきた。



歩兵十三聯隊酒保・食堂跡

現地見学会Bコース「菊池飛行場と黒石原奉安殿をめぐる」

当会会員 川口重雄

8月26日(月)8時40分、生憎の雨の中を現地見学会Bコース「菊池飛行場と黒石原(くろいしばる)奉安殿をめぐる」の50数名の参加者(座席は満席)の一人として大型バスに乗った。

最初の目的地は、熊本市の北東部の県内有数の農業地帯の合志(こうし)市須屋にある、国立療養所再春荘病院(旧陸軍傷痍軍人療養所再春荘)の敷地に立つ「留魂碑」。再春荘は1942年11月に開設された軍人・軍属などの結核治療を専門とする施設で、1944年3月の完工時には800床の大きな病院だった。留魂碑は、1945年5月13日の米軍機による空襲で亡くなった6名(うち4名は女性の看護学生)の殉職者を慰霊するために1951年に建立された、と碑文にある。二日前の8月24日、道一本隔てたハンセン病療養所の国立療養所菊池恵楓園を、同園のボランティアガイドをつとめる小林富代子さんらに案内されて見学、社会交流会館(歴史資料館)の展示で見た患者8名が生き埋め(うち2名が窒息死)となった同じ空襲だった。



花房飛行場跡給水塔(菊池市指定文化財)

小林富代子さんらに案内されて見学、社会交流会館(歴史資料館)の展示で見た患者8名が生き埋め(うち2名が窒息死)となった同じ空襲だった。

続いて、合志市豊岡の旧逓信省熊本航空機乗員養成所(1941年4月開所、通称黒石原飛行場)跡に立つ御真影(昭和天皇夫妻の写真)・教育勅語を納めた鉄筋コンクリートで頑丈に造られ、大理石で化粧された奉安殿。パイロットを夢見て534人の青年が訓練に励んだ、その跡地は戦後海外からの引き揚げ者などの開拓により今では豊かな農地に変貌した。中身のなくなった奉安殿が壊されず、熊本県内でも唯一原位置に原形をとどめ残されている。

1945年5月13日の米軍機延べ137機の空襲で壊滅状態となった陸軍菊池飛行場(別称花房・隈府(わいふ)飛行場、菊池市泗水(しすい)町)は、1940年8月に大刀洗陸軍飛行学校菊池教育隊の訓練のために開設された。熊本県内最大の陸軍飛行場で、陸軍通信学校や航空廠・陸軍病院なども併設され、3000人近い関係者が勤務していた。戦争末期には大

刀洗から知覧飛行場・万世飛行場(いずれも鹿児島県)など沖縄への特攻基地の中継地となった。車中で、元少年飛行兵前田祐助さん(92歳)から34名の死者を出した空襲の様子を聞いた。1940年から教育隊・航空廠・陸軍病院の給水施設として使用された高架給水塔(鉄筋コンクリート造・高さ約13.57m)は、空襲の機銃掃射で30ヵ所以上被弾したものの倒壊を免れ、戦後は国道387号線沿いの広大な飛行場跡地に入植した開拓団の人々の水源として2007年まで使われた。それは戦争遺跡であると同時に、地域の戦後史を見つめてきた物言わぬ証言者でもある。

2008年に発足した「花房(菊池)飛行場の戦争遺産を未来につたえる会」が運営する「菊池飛行場ミュージアム」(2014年開館)を見学、98歳の会長倉沢泰さんの講話を聞いた。戦後開拓団世代の生き証人である。その記録と記憶は、第3世代の会長代行永田昭さんらに引き継がれている。永田さんや伊藤利明さんらのご案内によるFWは、午後3時にお開きとなった。

拡大ガイド学習会再録(2019.7.6 於：来往舎中会議室)

ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築

運営委員 佐藤宗達

地下壕見学会で地上の施設：チャペルの説明では「設計者はウィリアム・メレル・ヴォーリズで横浜市の歴史的建造物に指定されております。代表的な作品には明治学院のチャペル、横浜共立学園などがあります」程度しかお話できておりません。むしろ近江兄弟社、メンソレータムの話が主となってしまいます。2014年がヴォーリズ(1880-1964)没後50年にあたり、彼の建築が再評価され、彼が設計した兵庫県西宮市の神戸女学院大学が国の重要文化財に指定されました。同年11月15日付けの日本経済新聞文化欄に彼のことが紹介されておりますので引用します。「米カンザス州出身。1905年に英語教師として来日。設計事務所を開業し、近江八幡を拠点に教会や学校、住宅など全国で1500件以上を設計した。41年、日本に帰化。一柳(ひとつやなぎ)満喜子と結婚し、一柳米来留(めれる)と名乗った。設計した主な作品に、大丸心斎橋店や山の上ホテル、旧居留地38番館など。明治学院大学、関西学院大学、同志社などにも設計した建物が残る。」なお韓国にも彼の設計した建物が残っております。ヴォーリズは教会を多く設計しましたが2017年4月発行の明治学院歴史資料館ニュースレターNo.8には次のように紹介されております。「当時外国人避暑地であった軽井沢にヴォーリズは夏の設計事務所を構えた。日本に派遣されてきた宣教師団体の多くは軽井沢に毎夏集まってお互いの交流を深めていた。日本における宣教活動の同志として受け入れられていたヴォーリズが全国の



東洋英和女学院本館 外観(左) 玄関内部(右)



神戸女学院 中庭

宣教師から建築の相談を受け入れていたことが全国へ活動を広げていった一因といえる。」

たまたま図書館で閲覧した2008年2月創元社刊の「ヴォーリズ建築の100年」には多くの建築の写真が掲載され主要作品リストもあるので皆さんに彼の作品を見る機会があれば参照用にと主要作品リストと作品数点の写真をコピーして配布しました。

海軍特別年少兵(特年兵)・少年兵

運営委員 山田 譲

『「雪風」に乗った少年～十五歳で出征した「海軍特別年少兵」』(西崎信夫著、小川万海子編)には、次のようなことが書かれています。

海軍は昭和16年7月5日、**海軍特別年少兵制度**を発表した。この時点での採用年令は15才以上16才未満だったが、翌年8月に追加条文で14才以上16才未満に引き下げられた。これはジュネーブ協定で兵士の下限年令を15才と定められていたのを、すり抜けるための苦肉の策といわれている。このこともあって、海軍特年兵は予科練ほど知られていなかったようだ。その数は、第1期生から4期生まで合計17,820名。そのうち戦死者は5,000余名といわれ、特に第1期生(昭和18年12月卒業)は3,200名中約2,000名が犠牲となり戦死率は6割以上。消耗品のように戦場に投入された。

選考基準はとて厳しく、身体検査、学力試験とも一般志願兵より高い合格基準だった。さらに鎮守府(4大軍港)ごとに合格者を厳選し、ほとんどがクラスの級長や1、2番の優等生ばかりだったという。まず海兵団(武山、大竹、相浦、舞鶴)で1年弱の基礎訓練を受け、さらに普通科練習生として術科学校で専門教育を5ヶ月受けて繰り上げ卒業し、実戦配備された。15才、16才の少年兵である。

教育・訓練は「分刻みで続く超スパルタ」で、レベルの高い「普通学」と盛りだくさんの「軍事学」、そして体育で猛訓練。規則に少しでも違反すれば往復ビンタや鉄拳の制裁。「軍人精神注入棒」という櫂の棒で尻をたたき「バッター」も日常茶飯事だった。その他、さまざまな「罰直」があった。これに耐えられず、いたましい自殺者や精神疾患患者も出た。



海軍特年兵之碑(東郷神社)

◎日吉の通信兵にも特年兵・少年兵

私たちが聞き取りをしたり講演していただいた方の中にも、海軍特年兵や少年兵だった方が少なくありません。そのなかで特年兵だったとお聞きしているのは3人です。

- ・新井安吉さん 14才で特年兵志願、日吉連合艦隊司令部暗号兵 会報112号記事
- ・近藤恭造さん 14才で特年兵志願、空母瑞鶴、大和田通信所暗号兵 会報129号記事
- ・西崎信夫さん 14才で特年兵志願、駆逐艦雪風水雷兵 会報127～8号記事
- ・平田一郎さん 14才で志願、横須賀通信学校 日吉暗号兵 会報120号記事
- ・大島久直さん 14才で志願、防府通信学校 日吉・奈良で電信兵 会報118～120号記事
- ・大小原昇さん 14才で志願、三重航空隊 陸戦隊で日吉警備兵
- ・馬場芳夫さん 15才で志願、防府通信学校 大和田通信所電信兵
- ・保坂初雄さん 18才で志願、防府通信学校 日吉電信兵 会報130号記事
- ・栗原啓二さん 19才で志願、防府通信学校 日吉・下田で暗号兵 会報115～6号記事
- ・高田賢司さん 19才で徴兵、逓信省研修所中央電信局勤務 日吉電信兵 会報139号記事

◎海軍飛行予科練習生(予科練)、陸軍少年飛行兵・少年通信兵

海軍の少年兵の制度として予科練がよく知られています。これは昭和4年に始められ、高等小学校卒業、満14才以上20才未満で教育期間3年(のちに短縮)、飛行戦技教育1年でした。したがって実戦配備は18才以上になり、未成年ですが少年兵と言えるかはちょっと微妙です。霞ヶ浦海軍航空隊、のちに土浦海軍航空隊で教育を受けました。その後、各地に予科練航空隊は増設されました。15年間で24万人が卒業し、うち19,000人が戦死といわれています。予科練出身者はアジア・太平洋戦争の航空機搭乗員の中核で、戦死率も高く昭和19年

からは特攻要員でした。しかし飛行機の生産も空襲で落ちこみ、隊員は回天、震洋、伏龍といった水中、水際特攻隊員に回された人も多かったようです。

他方、陸軍でも少年兵が志願募集されました。陸軍少年飛行兵学校は、東京、大津、大分にもうけられ、44,000人が卒業、4,500人が戦死。そのうち1割が特攻隊でした。また陸軍少年通信兵学校が昭和17年に相模原に開設され18年に東村山に移転し、3,720人が卒業、うち2,270人が戦地に送られました。

航空特攻戦死者数について

運営委員 岡本雅之



特攻機からの無線を傍受する通信兵／想像図

地下壕見学会における「通信室」のガイド説明の中で、特攻機からの突入信号(ツーという長音信号)と戦艦大和の沖縄特攻時のアメリカ艦載機の爆撃・雷撃による「大和」の傾いていく様子(傾斜角何度…と)の通信を、若い電信兵たちがこの場所で聞いていたと話している。

今年5月、見学者の方から「飛行機の特攻で何人くらい亡くなったのですか?」という質問を受けた。その場では「正確な数」についての知識がなく答えられなかった。この回答のために資料にあたり、一応の答えを見つけ、7月の「拡大ガイド学習会」でガイドの皆様を紹介した。

ここではその内容を簡単にまとめ説明することとしたい。調べるにあたり、航空特攻の戦死者

数とともに、特攻機はどのくらいの頻度で出撃したか(ほぼ毎日のように受信していた?と説明)、使われた機種(戦闘機か爆撃機か攻撃機か)はどうだったか等、また海軍と陸軍では航空特攻にどんな違いがあったのか、あるいはなかったか等、他にも疑問が出てきた。拡大ガイド学習会では入手することのできた資料により、海軍・陸軍別の戦死者数、特攻出撃の頻度、使用された機種についてデータを整理し、説明資料として出撃頻度や機種について陸・海軍別にまとめた。ここでは海軍を中心に記述した。

1. 航空特攻戦死者数

海軍 2,431人 陸軍 1,417人 合計 3,848人(中公新書『特攻—戦争と日本人—』栗原俊雄著 2015.8.25 発行 諸説あり) 「諸説あり」との補注がある通り、正確な人数ははっきりしない。また他の資料の数字として、航空特攻による二階級特進者数もほぼこの数字である。海軍 2,527人 陸軍 1,388人 合計 3,915人(『きけわだつみのこえ』岩波文庫 日本戦没学生記念会編 1995.12.18 発行)。おおむね、海軍、2,500人、陸軍、1,400人、合計 約3,900人の若者が亡くなったと説明していいだろう。

2. 航空特攻攻撃の出撃頻度について

特攻通信(ツーと言う長音信号)をこの地下の電信室で若い通信兵たちは受信していた。元通信兵の方の聞き取りでは、「ツーという音が聞こえてくるとたまらない気持だった」という証言を頂いている。その出撃頻度について、陸軍・海軍別、隊名別、日にち別に集約し、7月7日の拡大ガイド学習会で8ページの資料にまとめた。ここではそれをもとに簡単に概略を説明する。出典は『特攻伝説』 原勝洋 著 KKベストセラーズ 2006.11.24 発行。海軍の特攻隊は1944年10月20日、神風(しんぷう)特別攻撃隊(敷島隊・大和隊・朝日隊・山櫻隊)が編成され、続いて22日に菊水隊・若櫻隊、25日に艦爆の彗星隊、26日に葉桜隊・初櫻隊が編成され、以降、次々と編成・出撃していくことになる。初出撃は10

月21日大和隊の零戦3機がセブ基地から出撃した。それ以降10月30日までほぼ毎日、合計60機(零戦41機、艦上爆撃機彗星8機、九九式艦上爆撃機11機)が出撃した。一般的に10月25日の関行男大尉の敷島隊の攻撃が特攻第一号とされているのは戦果がはっきりしているからであろう。それ以降11月は14日間で99機、12月は11日間で96機、翌年1月は9日間で89機、2月は21日に八丈島から硫黄島方面に向け彗星・天山・零戦合計22機が出撃している。3月は10日間にわたり150機。4月は沖縄戦が始まり4月6日、海軍は菊水一号作戦を開始し、激しい特攻攻撃を続けた。4月(17日間)565機、5月(14日間)211機、6月(5日間)47機、7月(4日間)15機、8月(3日間)32機。

この『特攻伝説』では以上の様に合計1,386機の特攻機が出撃したとされる。出撃頻度については565機が出撃した4月でも一ヶ月間で17日の出撃であるので毎日とはいえない。陸軍の特攻機の出撃を合わせると4月は25日間の攻撃となる。海軍機の特攻攻撃の頻度は月の内半分強くらいの頻度ではないかと思う。(陸軍機もほぼ同様)

3. 特攻機の機種について

この『特攻伝説』によると出撃した隊別に機種が明確にされている場合と「爆戦(爆弾装備戦闘機)」としてあるものがあり、「爆戦」の詳細機種はわからない。(個人的には「零戦」がほとんどではないかと思う。)

明記してある機種別にまとめると以下の様になる。

- ◆戦闘機→零式艦上戦闘機316機・夜間戦闘機月光2機・爆戦327機
- ◆爆撃機→九六式艦上爆撃機11機・九九式艦上118機・彗星艦上169機・
銀河陸上爆撃機108機
- ◆攻撃機→(雷撃及び水平爆撃、特攻の時は爆弾装備)九七式艦上攻撃機71機・
天山艦上36機・流星艦上16機・一式陸上攻撃機58機・桜花55機
- ◆輸送機(飛行艇)→二式大艇1機。
- ◆偵察機→零式水上偵察機他4機・零式水上観測機35機
- ◆練習機→九三式中間練習機(赤とんぼ)9機・機上作業練習機白菊50機 **合計1,386機**

4. 陸軍の航空特攻について(参考)

陸軍の航空特攻は海軍と違ってかなり早い時点で組織として検討され、爆撃機の機体の改造から始まった。参謀本部二課(作戦課)で自爆(特攻)作戦を研究し、爆弾投下装置を外し起爆装置として長いツノをもつ機体を作り上げていく。1944年7月25日に陸軍航空本部が決済し、8月2日には立川飛行場にその姿(九九式双軽爆撃機)があった。

ただ九九式双軽爆撃機と四式重爆撃機「飛龍」による特別攻撃が実施されたのは1944年11月からである。1944年10月21日に銚田教導飛行師団に於いて編成され、同29日に「万朶隊」と命名された隊の一機(九九双軽)が1944年11月5日リバ基地から出撃している。四式重爆「飛龍」の「富嶽隊」の初出撃は同月7日、クラーク基地より1機が攻撃にでている。

このように陸軍に於いては自爆攻撃のために飛行機を改造して特攻専用機を作っていた。九九双軽爆撃機と四式重爆撃機「飛龍」。しかし、海軍の敷島隊の戦果などをみて、すぐに通常の単座戦闘機による特攻攻撃も増えていくことになる。一式戦闘機(隼)、三式戦闘機(飛燕)、四式戦闘機(疾風)、九七式戦闘機など、最後は海軍と同様偵察機や練習機も投入している。合計1,000機が特攻に参加した。

出撃頻度についてもほぼ海軍とおなじように出撃している。沖縄戦に始まった海軍の「菊水作戦」(6月21日の菊水十号作戦で終了)に応じて、陸軍も「航空総攻撃」として、4月6日の第一次総攻撃から6月までに十次に渡る航空総攻撃を実施している。月別の出撃機数は以下の通り。1944年11月29機、12月65機、1945年1月80機、2月0機、3月24機、4月372機、5月300機、6月110機、7月13機、8月7機、合計1,000機。以上、航

空特攻の戦死者、海軍およそ2,500名、陸軍1,400名、合計3,900名→約4,000名である。使われた機数は私の参照したこの資料(『特攻伝説』)では海軍機1,386機、陸軍機1,000機、合計2,386機となる。

ただ別な資料『日本の戦争Ⅱ 暴走の本質』山田朗著 2018.12.8発行、によると海軍の機数が大きく異なっている。(機種別明細にもかなりの差がある)『日本の戦争Ⅱ』によると、海軍1,916機、陸軍1,003機、合計2,919機となっている。『日本の戦争Ⅱ』には日にち別の陸・海軍別、機種別数なども詳細に書かれている。

私と違い、複数の資料にあたりご自分で集計されている。陸軍機についてはほぼ同じ機数であったが、海軍機については機種別にもかなりの差があり、527機の差となっている。

「爆戦」だけでも219機の違いがある。

したがって、特攻機の数についてはこの山田朗氏の海軍1,916機、陸軍1,003機、合計2,919機→約3,000機と覚えておこうと思う。

これからもガイドとしてより正しい説明をするために各種資料を読み込みたいと考えている。

寄稿

日吉の戦争遺跡ガイド養成講座を修了して

第13期ガイド養成講座受講者 嶋谷克彦

私は地元日吉に40年在住、地下壕は20年程前に町内会や子供のボーイカウト活動で2度見学した覚えがあります。当時配布された資料は黄ばみつつ本棚の片隅に保管されています。年始にふと見たタウンニュースでガイド養成講座を知り参加しました。もう70歳に手が届くところですが、仕事も落ち着いて来たので何かお役に立てればと単純に思った次第。終戦から74年、保存の会発足以来30年という年月はズシリと重い。この活動がよく続いていると思うと共に、これからが正念場と思います。戦後100年とかなれば語り部も大事ながら、更に地下壕の存在自体が歴史を雄弁に語るでしょう。残し保存することの意義を痛感致します。ガイドは皆、ボランティアですが、正しく説明するには精確に事実を把握していなければならず、先ずそのクリアがひと苦勞です。研修会、見学会や実習補佐をやりましたが、先輩ガイドの説明は立て板に水で感心しきり。我が身を思うと不安が募るところです。見学コースにおいて地下壕の主要ポイントがハイライトですが、そこで臨場感ある説明が出来るようになるには、よく学習して経験を積むことが大事のようです。最後に、この遺跡に関心の高まりはあるので、更に多くの応募者が参集することを期待します。



第13期ガイド養成講座初日(2019.1.12)

お知らせ 第14期(2020年度)日吉ガイド養成講座のご案内

講座回数:4回

日程:2020.1.11(土)、3.7(土)、4.4(土)、5.9(土) 時間:いずれも、13時~15時半
3.7(土)は16時半までフィールドワーク

場所:慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎会議室 参加費:2,000円(全4回分)

申込先:ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号をご記入の上、
下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。 〆切 1月10日(木)

横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方 「ガイド養成講座係」

TEL&FAX 045-562-0443(午前・夜間)

主催 日吉台地下壕保存の会

お知らせ

第27回横浜・川崎平和のための戦争展2019 実施要項

1. 開催にあたって

「横浜・川崎平和のための戦争展」は、地域の戦争遺跡の保存と活用を進める市民団体による手作りの戦争展です。

川崎市では昨年、地域文化財指定制度がつくられ、陸軍登戸研究所遺構群と東部62部隊関連の遺物などが指定されました。これを土台に陸軍登戸研究所遺構群を国の登録文化財にしようという機運が高まっています。また、中原区では空襲・戦災を記録する活動も続けられています。

戦後70年以上が経ち、戦争の記憶を伝えるのは「人から物へ」と移っていると言われます。私たち参加4団体は、戦争遺跡という「物(もの)」の保存活動だけでなく、戦場や空襲の体験など、失われゆく「人(ひと)」の記憶を掘り起こし、市民や子供たちに伝える活動を進めてきました。そうした中で、実に多くの青少年たちが戦争に関わらざるをえなかった現実が見えてきました。たとえば日吉の連合艦隊司令部地下壕には、10代の通信兵たちの姿もありました。

27回目となる今年は、「少年・少女と戦争～戦争遺跡から見えてくること～」というテーマで、関連するパネルの展示や若者の発表、講演会を行います。これまで私たちが積み重ねてきた取り組みの中から見えてきたこと、考えられることを中心に、ご来場の皆様と語り合う場にしたいと思います。

2. テーマ 《少年・少女と戦争》 ～戦争遺跡から見えてくること～
3. 主 催 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会
- 実施団体 日吉台地下壕保存の会／登戸研究所保存の会／川崎中原の空襲・戦災を記録する会／みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会
4. 代 表 阿久沢武史 日吉台地下壕保存の会
- 副代表 姫田光義 登戸研究所保存の会
- 実行委員 主催団体より実行委員を選び企画運営にあたる
5. 開催日程 2019年11月29日(金)～30日(土) 9:00～17:00
6. 会 場 慶應義塾日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース・イベントテラス
入場無料 事前予約不要
7. 内 容
- ☆展示 来往舎イベントテラス 11月29、30日 9:00～17:00
 実施団体による写真パネル・実物資料・市民の描いた戦争体験絵画ほか
- ☆日吉キャンパスツアー 11月30日(土) 10:00～11:00
 地上のみ見学
- ☆若者の発表 来往舎シンポジウムスペース 11月30日 11:00～12:00
 ○日吉台中学校演劇部による朗読劇
 ○高校生による研究報告
- ☆講演会 来往舎シンポジウムスペース 11月30日 13:00～15:00
 演題 ある海軍特別年少兵の生き抜く力
 『「雪風」に乗った少年』を語る
 講師 小川万海子さん 『「雪風」に乗った少年』編者
- ☆各団体から活動報告 同会場において 15:00～16:00
8. 事務担当 亀岡敦子 (045-561-2758) 森田忠正 (044-911-2726) 江連恭弘

報告

港北図書館パネル展示会&講演会

運営委員 小山信雄



講演会での質疑応答

(2019.8.12 於：港北図書館2階会議室A)

今年で6回目の開催となりましたが、8月に港北図書館にてパネル展示会(8.4~8.31)及び講演会(8.12)を行いました。講演会では、初めて地下壕や保存の会の存在を知った方や、戦争体験者の家族の方など様々な方々にご来場いただきました。今回は、20代から80歳代までの幅広い年齢の方々、合計19名の参加となり、1時間の講義の後も多く質問をいただきました。8.18、8.25に行った展示会場でのミニレクチャーにも、両日で30名以上の方々が熱心に私達の説明に耳を傾けてくれました。少しずつではありますが、日吉台地下壕に関する関心が広まりつつあると感じており、これからも「継続は力なり」の精神で活動を続けてゆきたいと思います。

連載

海外戦跡めぐり (12) 仏印のエッフェル橋・ベトナム

運営委員 佐藤宗達

今年6月、ベトナムの首都・ハノイを往訪。市内中心部の紅河に架かるロン・ビエン橋を自分の足で歩いてみました。歩道部分はとても狭くおまけに足場も安定せず、思うように歩くことが出来ませんでした。頑張って橋の往復3.4kmを徒歩で走破しました。橋には銘板「1899-1902/DAYDE & PILLE/PARIS」があり、1899年着工、1902年完成がわかります。橋は鉄道・車道(四輪は不可)・歩道が共存しております。鉄道は本数少ないものの、ハノイ〜ホーチミンシティー間の夜行寝台列車はバックパッカーに人気で満席とのこと。車道はバイクの波ですが、合間に自転車が走っております。歩道はというと誰もおりません。すれ違ったのは3人、いずれも旧宗主国のフランス人とおぼしき青年。「ボンジュール」と声をかけましたら反応してくれました。

この橋はフランス人土木技師・ギュスターブ・エッフェル(1832-1923)が設計したと伝えられており、全長約1,700mの美しいこの橋はハノイ市民の誇りです。ベトナム戦争が本格化した1965年2月には北爆が開始され、米軍の空軍参謀総長のカーチス・ルメイが「北ベトナムを石器時代に戻してやる」と推進したのです。攻撃目標のひとつとしてロン・ビエン橋が狙われました。橋を爆撃して中国からの補給ルートの切断と、ハノイ市民の士気を喪失させるのが目的でした。攻撃は橋をまるごと爆撃するのではなく橋を構成するユニットのいくつかを爆撃したので、その都度応急修理をして復旧、また爆撃を受ければ応急修理・復旧の繰り返しで、1975年の終戦まで乗り切り、現在も当時の爆撃のキズ跡を残したまま市民に活用されております。

エッフェル氏はパリのエッフェル塔、ニューヨークの自由の女神像で知られておりますが専門分野は鉄橋・鉄道駅舎の設計・施工の土木技師です。フランス国内だけでなく国外、そして極東の仏印・サイゴン(現ホーチミンシティー)、中国・上海にも事務所を構えました。橋の銘板にあるDAYDE & PILLE社はエッフェル氏の親族が経営する建設会社なのでエッ

エルの設計と云われておりましたが、エッフェル氏は1890年後半にはすでに現役を引退しておりましたので、実のところ真相は不明です。



橋にある銘板
「1899-1902/DAYDÉ&PILLÉ/PARIS」

ベトナム戦争の
傷跡の残る現在の
ロン・ビエン橋



鉄道・車道・歩道（右端の狭い部分）が共存しています！



爆撃前の美しかったロン・ビエン橋全景（ベトナム観光協会提供）

聞き取り**日吉海軍勤務の祖父にヤギの乳運び
—山本克彦さんの小学生時代—**

運営委員 山田 譲 記・文責

【8月14日の定例見学会に参加された山本克彦さんから、おもしろいお話をお聞きし、その後お手紙もいただきました。それで、山本さんの日吉での戦中・戦後の体験をまとめてみました。山本さんは現在、川崎市宮前区にお住まいですが、1945年4月から1947年まで小学生の時、日吉にお住まいでした。その後また、大学1年から32才まで日吉にいらしたそうです。】

☆英語が堪能だった祖父・堀内長雄さん

日吉の海軍におじいさんが勤めていて、週2回ヤギの乳を届けに行きました。自分一人で行きました。おじいさんは堀内長雄（おさお）といって明治8年生まれ。英語ができたらしくて親の話では暗号とかやっていたらしいが、よくわかりません。海軍の水交社や海軍省に通っていたという話を思い出します。調べたら明治44年発刊の『英和海軍術語辞彙』（博文社発行）の編者でした。家に勲章がいっぱいありました。

第一校舎の角に衛兵がいて、おじいさんの名を言うと呼んでくれました。マムシ谷の地下壕に入ったとおもいます。中は薄暗かった。おじいさんはそのころ下北沢に住んでいて（当時69才）、そこから日吉に通勤していました。昭和20年の4月（または5月）から8月までの短期間だったようです。衛兵はセーラー服でなくカーキ色の服で、ていねいな対応でした。兵隊さんに親切にしてもらい、麦のご飯とか、垂れ幕の映画を見せてもらった記憶があります。

☆建物疎開で六本木から日吉に引っ越し

六本木の家が建物疎開で壊されて、昭和20年4月上旬に日吉に引っ越ししました。日吉本町の猿渡（さわたり）医師の家が、疎開で空き家になっていると聞いて借りました。今の普通部通りの二つ目の角の家でした。猿渡さんの家は大きく、庭に桜の大木が4-5本ありました。日吉に来た時、父は建物疎開で家を壊されて頭にきて、家財道具をすべて持ってきました。父は近所の農家（どれも小嶋さん）に家財をあげ、同姓なのでタタミ小嶋、風呂小嶋（猿渡家には五右衛門風呂があったので風呂桶不要）、タンス小嶋、障子小嶋と呼び分け、お返しにヤギの乳をもらったりしていました。ヤギは日吉駅前のロータリーに6-7匹つながれていました。

自分はその時小学2年生で昭和22年の4年生の時まで日吉に住んでいました。日吉台小学校に入るはずだったのが、手続きが遅れているうちに学校が空襲で燃えてしまいました（4月15日）。自分は夜中に、燃えさかる校舎を見ながら学校の外側の道を金蔵寺へと逃げたのですが、広い校庭を越えて熱さが風になって吹きつけてきました。頭上にB-29が独特の低い音で通過していった後、銀のモールの塊（大玉ころがしの玉位の印象）が暗い夜空からフワッと現われ、「キレイだ」と思いました。小学2年だったので恐怖は感じませんでした。猿渡家は焼けずに、間に畑があってその向うの床屋さんから先は焼けたようです。逃げるために外へ出たら、床屋さんが火に包まれていました。その後の授業を金蔵寺でやるというので見に行ったら、とても授業をやれる状態ではなくて母にそう言ったら、田園調布第二国民学校に入学（編入）することになりました。

当時、兵隊さんは私の見た限り全員カーキ色の国防色で、慶応側でも反対の住宅地側へ現れた兵隊さんもそうでした。ある日2人の兵隊さんが「水を飲ませて」と台所に来たので母が上にあげて水をあげたのが縁で、時に二人で（一人の時もあった？）休みにくるようになり、昼寝はしなかったとしても一間廊下で横になって休んでいくようになりました。空襲の

ない時は静かな住宅地でした。終戦になって二人が「田舎に帰ります」と挨拶に来ました。海軍で備蓄していたらしい立派な缶詰を1缶置いていってくれました。素朴な若い青年でした。何のために駅のこちら側へ来たのでしょうか？

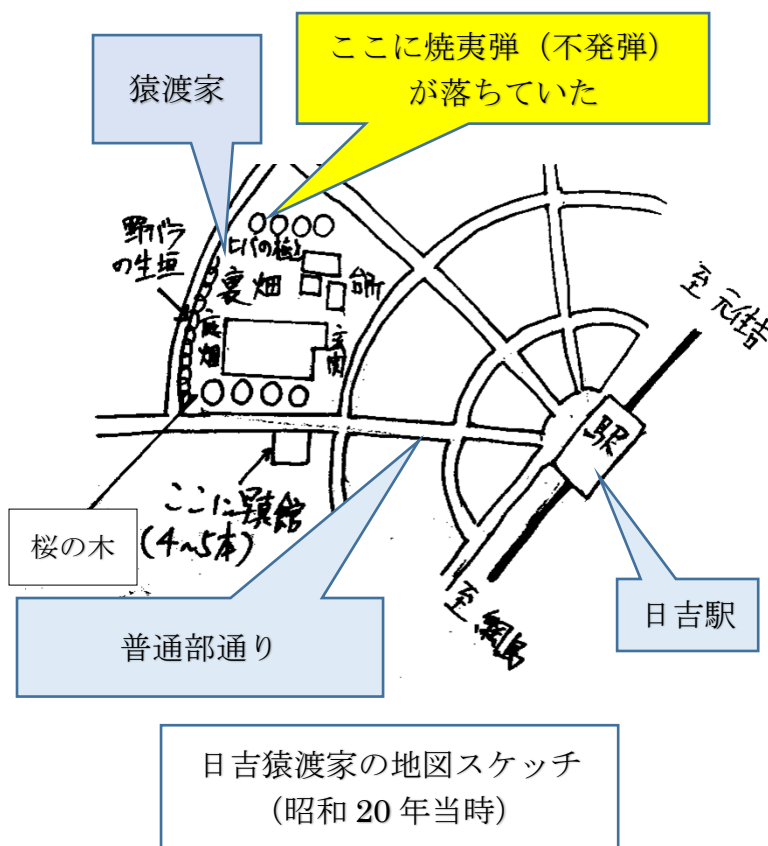
☆戦後はアメリカ兵からドーナツ

終戦までは、駅に行って駅員さんと遊んだりしましたが、戦後はパンパンガールがきれいな服を着て何人もいたので、怖くなって行かなくなりました。米兵に食堂でドーナツをもらいました。ものすごくおいしかった。アメリカ兵も西口側にくるようになり、クロタイ（これは確かです）少佐？は年配の潔白な人でした。兵隊の中にはチョコレートと交換で日本のものを集める人もいて、母の羽織が小さなチョコ1個、着物が大きめのチョコ1個に交換されました。

戦後何ヶ月かして駅の方で、小さな爆発音がしたので振り返ると、男の人の五指が破れて、指が倍の長さでたれ下がっていました。ダラリとした手を片手で抑えて「アー！お母さんに申し訳ない」と叫んでいました。万年筆にプロペラがついた様な超小型弾を拾って被害にあったようです。猿渡家南側に写真屋があり、戦後ジープの写真など飾ってありました。猿渡家北側には不発の焼夷弾が落ちていました。

六本木の家には犬も猫もおらず、日吉ではじめてヤギを見ました。慶応大学のグラウンド下に池があって蛙の卵が木から下がり、オタマジャクシから子蛙に変わってグラウンド内の草地で無数の子蛙が飛び跳ねていました。日吉にはいろいろな思い出があります。私は4年生からは東北沢の北沢小学校、その後世田谷の弦巻小学校、最後は経堂の和光学園小学校と住宅事情で6回転校しました。しかし日吉台小学校には、足を踏み入れることはありませんでした。

【調べてみると堀内長雄氏は、大正2年の官報に「補 海軍軍令部付 海軍編修」と記されていたので、海軍文官（事務官）でかなり偉かったようです。文中で「銀のモールの塊」とあるのは、レーダー攪乱用のアルミ箔のリボンと思われます。日吉の理事生がこれを拾い、現物が残っています。】



現在は店舗が立ち並ぶ普通部通り
(撮影：令和元年秋)

活動の記録 2019年7月～10月

7/25(木) 会報139号発送(来往舎205号室)

7/27(土) 定例見学会 55名

7/28(日) ガイド学習会(菊名フラット)

7/31(水) 夏休み見学会 60名

8/3(土) 夏休み見学会 65名

港北図書館展示設営

(展示8/3～31)

8/9(金) 「読売中高生新聞」に紹介記事

「戦争遺跡は語る 終戦間際の切迫鮮明

身近にも残る『歴史』として 松代大本営・

日吉台地下壕など、12件を紹介している

8/10(土) 定例見学会 56名

8/12(月) 日吉台地下壕講演会

(港北図書館) 参加者19名

8/14(水) 定例見学会 32名

8/24(土)～26(月) 第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会(熊本市国際交流会館) 参加者350名

9/2(月) 「フィールドワーク日吉・帝国海軍大地下壕」第4版第1刷発行 1200部

9/11(水) 定例見学会 51名

平和のための戦争展横浜・川崎実行委員会(法政第二高校教育研究所)

9/12(木) 地下壕見学会 日本体育学会第70大会(日吉キャンパスで開催) 25名

9/17(火) 運営委員会(来往舎205号室)

9/22(日) ガイド学習会(菊名フラット)

9/24(火) 地下壕見学会 日吉台小学校6年生 112名

9/28(土) 定例見学会 48名

10/8(火) 運営委員会(来往舎205号室)

10/9(水) 定例見学会 57名

平和のための戦争展横浜・川崎実行委員会(法政第二高校教育研究所)



来年3月竣工めざし工事が進む新「日吉記念館」

★地下壕見学会について(予約申込が必要です)

定例見学会は毎月2回実施(原則として 第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分) 11/13(水)・11/16(土)・12/11(水)・12/21(土)・1/8(水)・1/25(土)・2/5(水)・2/22(土)・3/11(水)・3/28(土) を予定しています。

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会